



## 橋本 薫

(一社) 前橋まちなかエージェンシー

代表理事

(株) まちの開発舎

代表取締役

1977年生、群馬県前橋市出身。

(株) まちの開発舎 代表取締役として「まえばしギャラリー」の不動産開発と管理運営を行う。(一社) 前橋まちなかエージェンシー代表理事として官民連携した都市再生活動を通してまちづくりを推進する組織を運営。前橋工科大学及び共愛学園前橋国際大学にて非常勤講師を務める。

2019年関東商工会議所連合会ベストアクション表彰受賞、2022年ふるさと名品オブザイヤー地域創生賞及び審査員特別賞受賞、MED GUNMA2022前橋市長賞受賞。

## 1.2 団体紹介

- 群馬県前橋市の中心市街地において、多岐に渡るまちづくり事業を展開している。

まちの事務局

一般社団法人 前橋まちなかエージェンシー (MMA)



代表 | 橋本薫

創業 | 2016年

従業員 | 6名

住所 | 群馬県前橋市  
千代田街2-10-2

VISION |  
LOCALIFE DE+SIGN  
デザインの力で、前橋の「ま  
ちなか」から日本の地方を  
もっと面白くする。

まちづくり会社として前橋中央通りに拠点をおき、まちの事務局として各組織委と連携し地方都市でのライフスタイルを伝えるコンテンツ作成やメディアを通しての発信・編集、不動産の管理や教育を担う。

- ・前橋BOOKFES 事務局
- ・前橋国際芸術祭 事務局
- ・シェアオフィスcomm運用
- ・赤城山ランドデザイン策定業務

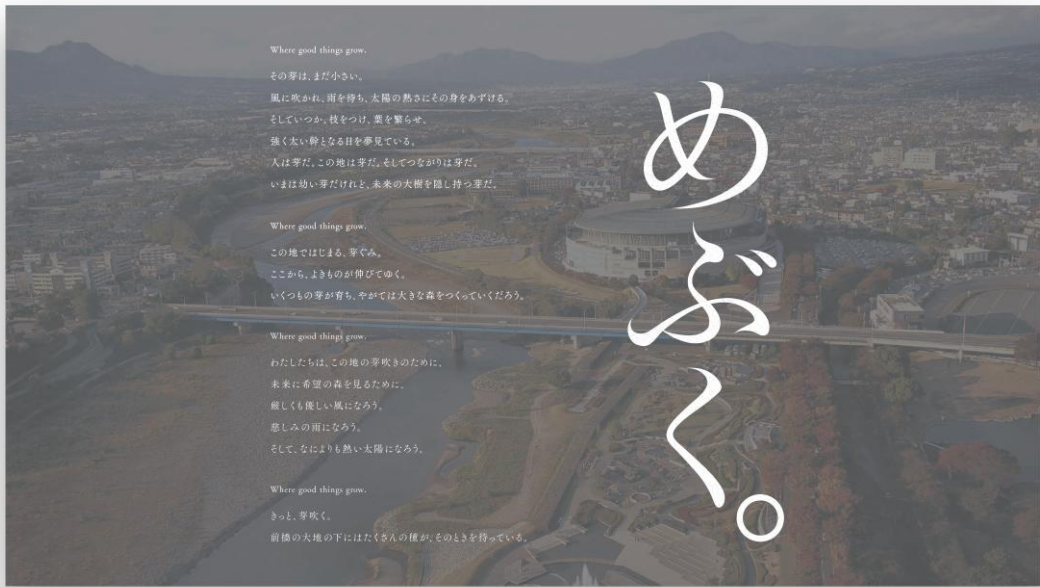
- ・前橋まちなか新聞 刊行
- ・視察団体向け まちあるきツアー 実施
- ・前橋デザインスクール 実施
- ・前橋に行きたくなる本 「めぶっく。」 刊行

### MMAとまちの組織の連携



# <前橋のまちづくり>

■ 2016年に前橋市が掲げたビジョン「めぶく。」に基づき、中心市街地エリアの開発が進行中。



Where good things grow.  
その芽は、まだ小さい。  
風に吹かれ、雨を待ち、太陽の熱さにその身をあずける。  
そしていつか、枝を上げ、葉を繁らせ、  
強く太い幹となる目を見ている。  
人は芽だ、この地は芽だ、そしてつなぐは芽だ。  
いまは幼い芽だけれど、未来の大樹を隠し持つ芽だ。

Where good things grow.  
この地ではじまる、芽ぐみ。  
ここから、よきものが伸びてゆく。  
いくつもの芽が育ち、やがては大きな森をつくっていくだろう。

Where good things grow.  
わたしたちは、この地の芽吹きのために、  
未来に希望の森を見るために、  
疲しくも優しい風になる。  
恋しみの雨になろう。  
そして、なによりも熱い太陽になろう。

Where good things grow.  
きっと、芽吹く。  
前橋の大地の下にはたくさんの種が、そのときを待っている。

まちの過去と現在

MAEBASHI  
MACHINAKA  
AGENCY



2010 ごろ

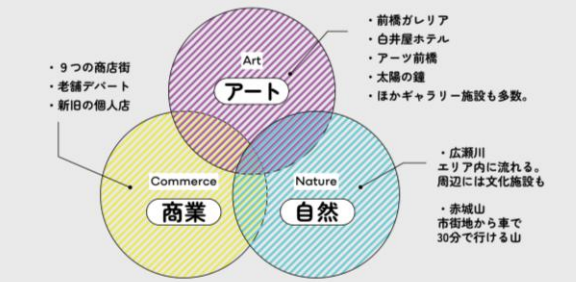


2025

まちなかとは

MAEBASHI  
MACHINAKA  
AGENCY

## 前橋の中心市街地エリア まちなか



まちの過去と現在

MAEBASHI  
MACHINAKA  
AGENCY



2018 ごろ



2025

# <前橋国際芸術祭>

- また、直近は2026年9月の「前橋国際芸術祭」をマイルストーンの1つとして、開催に向け準備が進行中。

【前橋から世界へ発信する、2年に1度の芸術の祭典が始動】アートと建築が誘う、都市生成の物語へ。 第1回「前橋国際芸術祭」2026年9月に開催決定！

開催テーマは「めぶく。Where good things grow.」、2026年9月から12月まで80日間、アーツ前橋、まえばしギャラリー、白井屋ホテル、前橋文学館、前橋市中心市街地エリアなどで開催

エイベックス・クリエイター・エージェンシー株式会社

2025年8月21日 15時00分



田中 仁 氏



蜷川 美花 氏



渋谷 慶一郎 氏

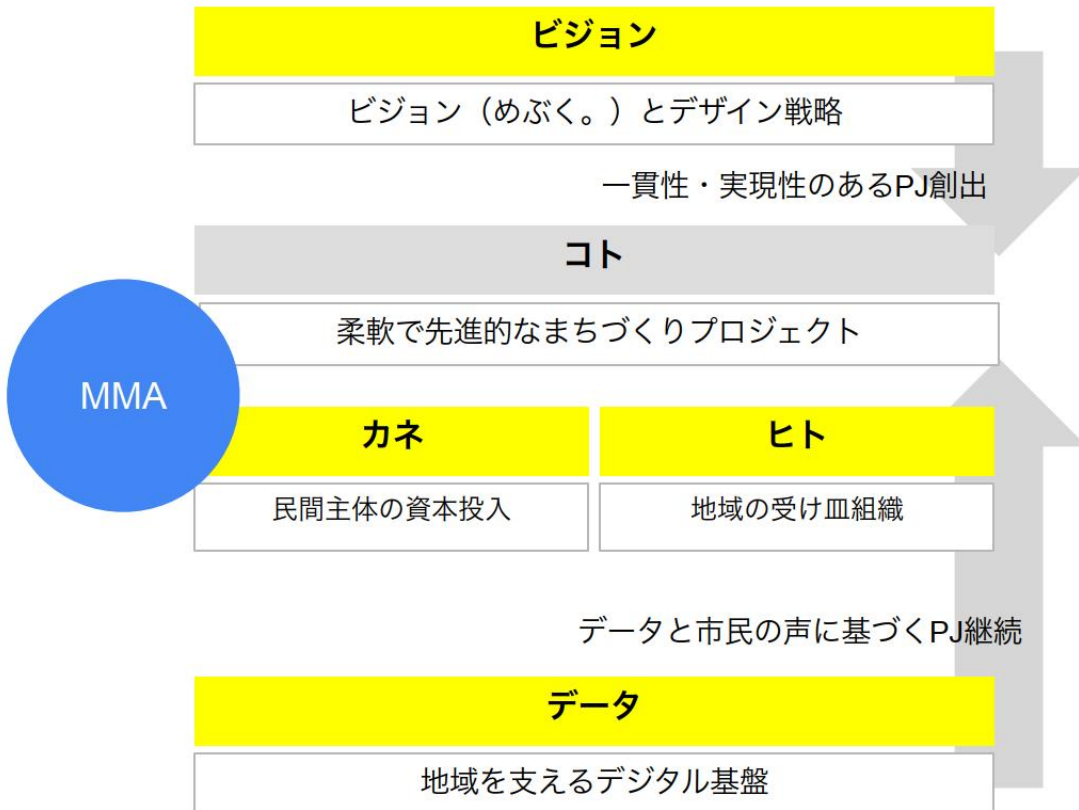


松田 文登 氏

## 2.1 事業背景

- すでに前橋では民間主導でのまちづくりが推進されるエコシステムのフレームは機能し始めている。
- 一方で、それぞれのプロジェクト実行段階になると内容に応じて必要なスキルや体制が多様化・複雑化してくるため、地域内でそれらの不足を充足することは難しい状況。
- 不足するスキルと人材の獲得のために都市部のハイスキル人材と地域のニーズをマッチングしながら継続的にプロジェクトに関与してもらうとともに、地域内の人材育成も進めていく循環の創出を目的として本事業を実施する。

### 前橋のまちづくりエコシステム



### まちのアセットの蓄積



**GOOD**  
より大規模な  
プロジェクト創出  
が可能に

**BAD**  
必要なスキル・  
体制が複雑化



地域外の企業等に、まちづくりのパートナーとして  
参画・投資してもらおう受け皿となる仕組みづくりを検証

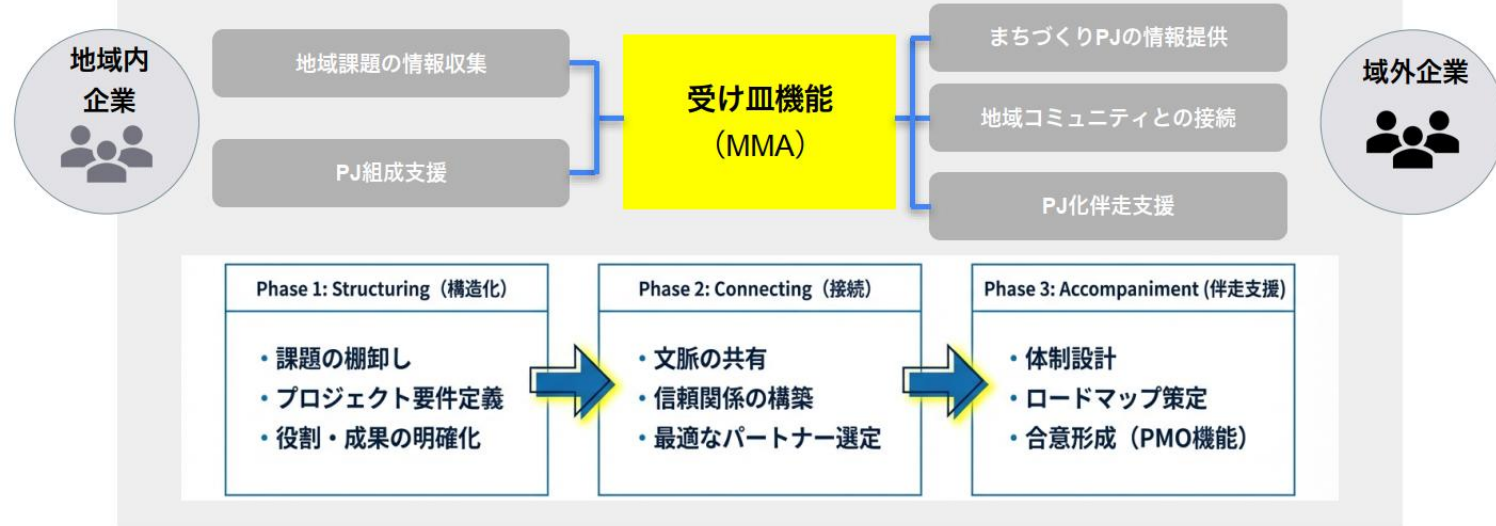
### 3.1 実証を通じて目指した仕組み

- 本事業のスコープである「域外人材と地域団体のマッチングによる持続可能なプロジェクト実施」に向けて、MMAが「受け皿機能」を担い、双方のニーズシーズを理解した上で、相談～紹介～参画～PJ運営までを一貫して伴走することで持続的なまちづくりプロジェクト運営を実現する。
- 現在も都市企業からの視察対応や相談の対応を行なっているものの、無償での属人的な対応となりMMAとしての組織的な対応まで至っていないため、「受け皿機能」としてキャッシュポイントの創出が可能なのか併せて検討する。

#### 目指す仕組み

地域の課題・困りごとをプロジェクトに翻訳し、企業の関わりしるを提示

#### 前橋共創連携プラットフォーム（MAC：Maebashi Alliance for Co-creation）



#### <企業のニーズとタイプ (一例) >



#### A: 模索・視察型

状態：前橋に関心はあるが、自社として何をやるか未確定  
目的：文脈理解と一次情報接続から、筋の良いテーマ仮説を持ち帰る  
論点：社内で「なぜ前橋か」「どの領域で価値が出るか」説明したい

#### B: 実装・拡張型

状態：入口となるPJや領域は見えており、次の構想が課題  
目的：地域と関係値を築き、成果が出る形でプロジェクトを展開させる  
論点：体制・役割・成果・リスクを明確にし、「形になる状態」にしたい

① Structuring：漠然とした「困りごと」を言語化する最重要フェーズ

② Connecting：スキルだけでなく「マインド・文脈」の適合を見る

③ Accompaniment：導入で終わらせず、運用に乗るまで支える

## 3.2 実施内容

- 域外企業及びハイクラス人材視点と、地域でまちづくりに取り組む団体の双方にとって意義のある取組（≒継続性がある）モデルの構築に向けて、双方でクリアすべき論点を整理するため、ヒアリングを行いながら各プロジェクトの根詰まりの原因の検討を行った。
- それらを通じて単なる「人手不足」が原因でプロジェクトが滞っているのではなく、本来必要な役割が足りていないということ。また、その役割を埋めるにはどのような連携が必要かを検討した。

ステップ1

### 一次情報の棚卸し

アンケート、ヒアリングを行い現場の実態を収集。  
課題だけでなく、構造を把握できる情報を引き出す。

#### 【実施対象】

前橋への出向者、地域内企業、前橋に進出した地域外企業、進出を検討する地域外企業

#### 【ねらい】

- ① <地域内> 課題の原因が見えるようにキモとなる情報を集める。
- ② <域外企業> 企業にとっての参画判断に必要な材料が何かを掴む。

#### 【成果】

検討段階から進行中のプロジェクトまで、域外企業側におけるポイントやメリット、地域側におけるプロジェクトの現状について鮮度の高い情報が得られた。

ステップ2

### 分析

一次情報をもとに、課題を分析

#### 【分析対象プロジェクト】

前橋国際芸術祭、めぶくコミュニティ

#### 【ねらい】

プロジェクトや事業の局面や構造を整理し、根詰まりの原因となる課題を明確化する

#### 【成果】

局面・運用・体制の構造が整理され、次の一手が議論できる状態になった。

ステップ3

### 翻訳

抱える課題を「空席（不足機能）」として表現し直し、参画の“入り口”をつくった

#### 【ねらい】

分析で見えた課題を、企業が理解できる「論点」と「役割」に変換し、関わりしろとして見せる。

#### 【成果】

地域側の課題が、人手不足論から「受け皿（運用・体制）設計」の論点として整理された。

	前橋 国際芸術祭	めぶくID
一次情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでのまちづくり資産の集約。</li> <li>次のステップにもつながる戦略性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「作る」段階から「使う」段階への移行</li> <li>出向者での運営</li> </ul>
見えた課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>構想やキュレーションは成立するが、本番までに実装・運用を担えるプロが存在していない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ユースケースを生むための運用機能の設計が必要</li> </ul>
役割への翻訳	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 制作統括 複数会場や行政調整、体験品質の均一化。</li> <li>2. 情報・導線編集 サイン計画やWeb、チケット動線などを一気通貫で設計。</li> <li>3. ファイナンス・契約 助成金管理や契約処理、事務局業務</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実装機会デザイン 「使う場面」を企画し、イベントや店舗体験にID利用を埋め込む。</li> <li>2. ローカル責任者 地域の文脈と関係性を踏まえ、連携の調整、合意形成を担う</li> </ol>

## 補足：MAC運用イメージ（域外企業向け）

- 域外企業がMACに参画する際は、オンボーディングとしてまちづくりの各種情報をインプットした後、定期的な対面/オンラインでのプログラムを提供する。最終的な出口として、プロジェクトへの参画・創出に繋がる運用を想定。

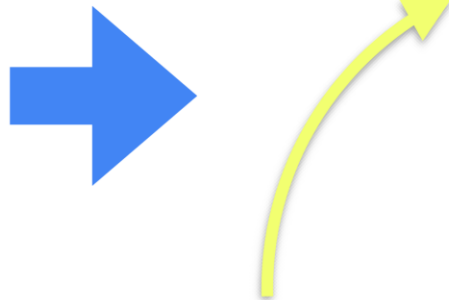
### <全体フロー>

#### MAC参画時

##### 【オンボーディング】

前橋のまちづくりの動きを構造的にインプット。また、企業側の状況整理・把握（関心領域／自社アセット／制約条件）を実施。

#### 月一回の対面機会 & オンラインMTG




#### 【MACプログラム】 リアル実施

講師や地域事業者、関係者との対話・ワークショップ、意思決定に必要な現場を押さえるまち案内を組み合わせ、“関係と理解の土台”をつくります。

#### 【前橋デザインスクール】 (MDS)


前橋のまちづくりに関心を持つ人や企業と、実際に前橋でプロジェクトを動かしてきた先駆者をつなぐための、月1回のリアル講義プログラム。

 リアル実施

プロジェクトへの  
参画・創出

#### 【フォローアップ】

対話や現場体験で出てきた論点を回収し、何が未確定で誰と何を決めるべきか、どこを検証すれば前に進むかを整理、追加情報の確認、役割の切り出しなど次の一手を具体化。

 オンライン

# 企業の参画メリット

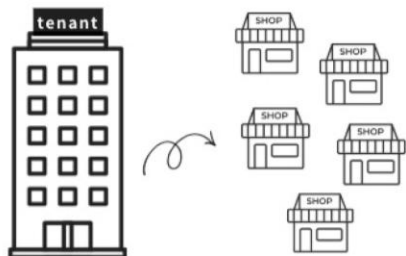
- 域外企業にとってMACに参画することは、前橋との共創実現の糸口として機能し、将来的にはCSVの観点からのメリット享受が可能と史料。

**CSV** (Creative Shared Value) = "社会価値と事業価値を同時に生む経営OS"

## 前橋との共創で得られる3つの価値

01

本業とつながる  
CSVプロジェクトが  
立ち上がる。



前橋の現場に企業アセットを当て、仮説検証を通じて“事業の芽”を具体化し育てていくことができます。

02

越境と実践で  
人材が育ち、  
社内に還元できる。



現場で意思決定と推進を経験し、学びと型を持ち帰って次のプロジェクトに活かせます。

03

信頼と  
つながりが  
資産として残る。



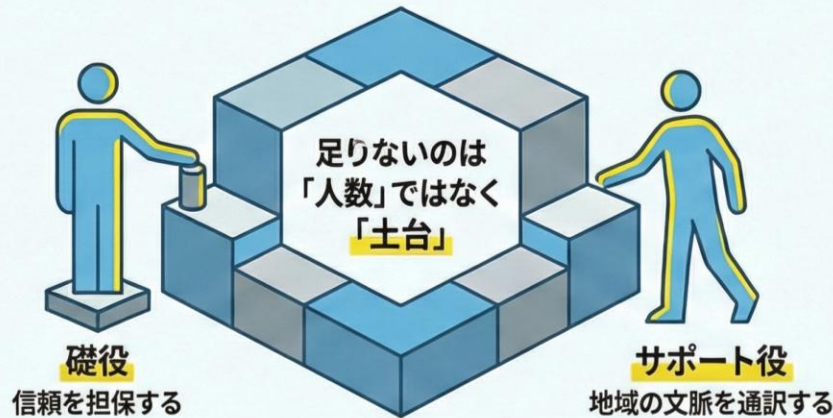
行政・地域企業・プレイヤーとの関係資本が蓄積し、次の共創機会につながります。

## 4.1 実証を通して見えた2つの気づき

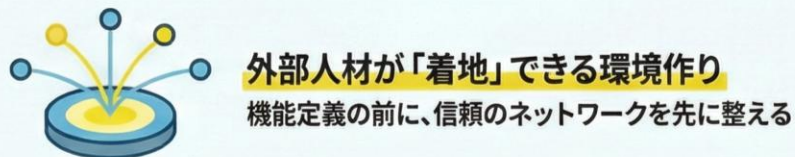
■ MACの運用にあたり、①受入地域側の実装の土台整備、②域外企業を継続的に巻き込む効果的指標の設計、の2点が必要不可欠である

# 地域プロジェクトを成功に導く「実装の土台」と「指標の設計」

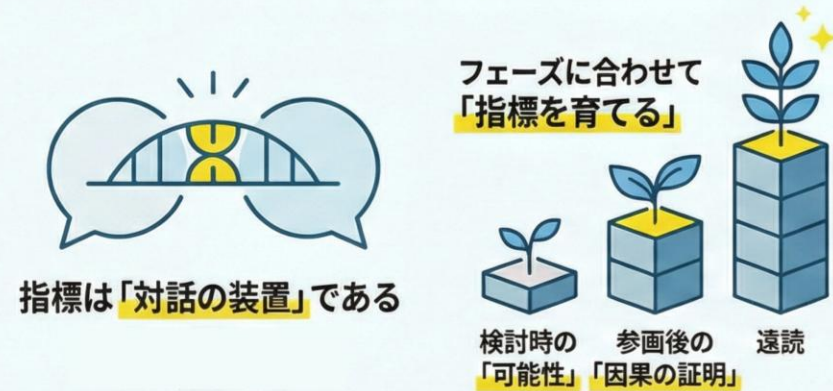
地上戦を成立させる「内側の土台」  
関係性と対話の厚みが必要



成功の鍵を握る「2つの役割」



共感を共同の意思決定に変える「指標の設計」  
企業と地域が同じ地図を持つための共通言語

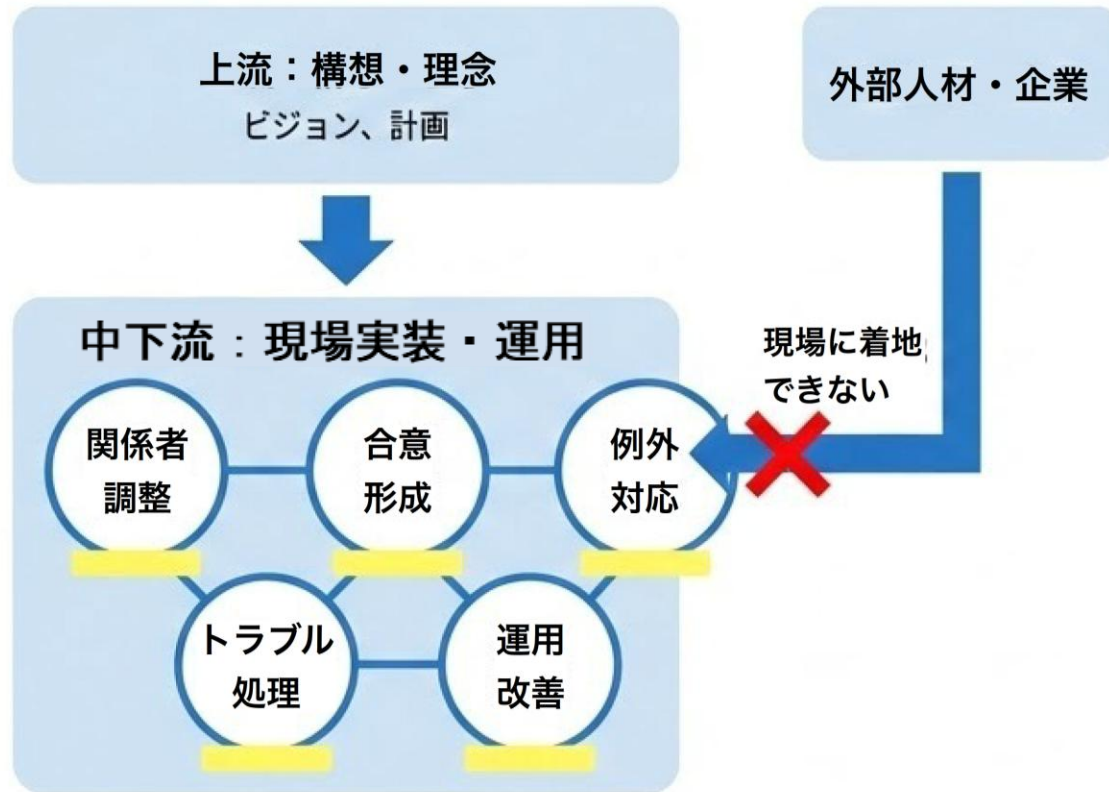


<b>入口の材料</b> <small>(企業参画判断のための実績)</small>	出店数	人流	売上	参加人数
<b>運用の検証対象</b> <small>(現場変化・手応えの仮説)</small>	<b>住民の行動変容 運用の手応え</b>			

## 4.1.1 現場運用が可能な体制整備

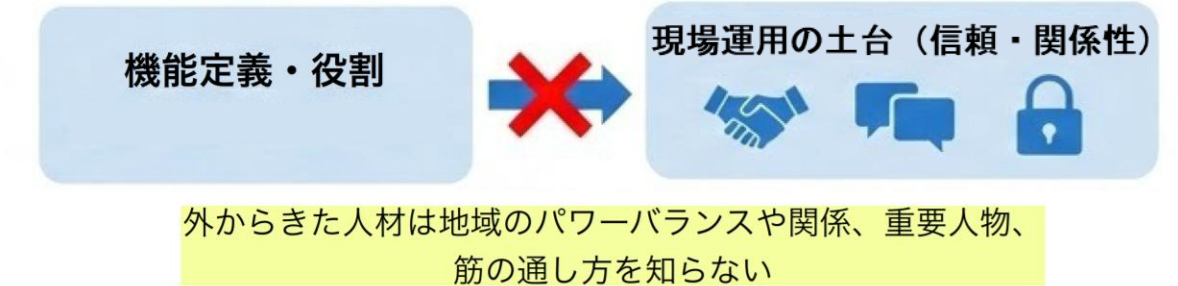
- 外部から人材を呼ぶこと自体は有効だが、実証で、受け入れ側の現場体制（現場に張り付き、信頼を育み、利害を調整して運用を回す）が整っていないと、参画は単発の応援で終わり効果を発揮しないと分かった。礎役・サポート役など受け皿づくりが先で、役割定義もその土台があって初めて機能する。

### 1) 何が起きているのか（構造）



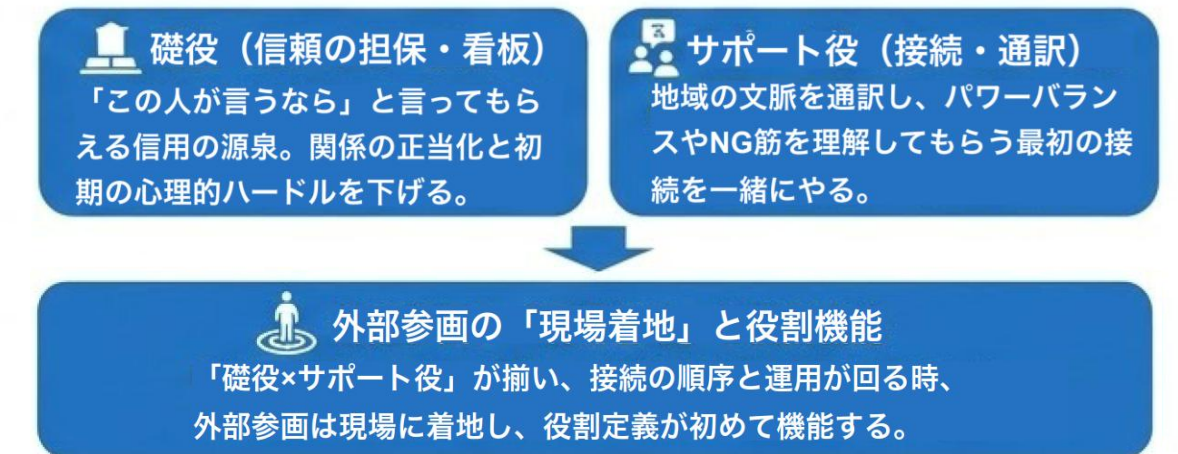
現場運用は「作業量」よりも「関係性と対話の厚み」が重要になる。

### 2) 「機能定義」だけでは足りない理由



### 3) 変えるべきポイント

「人が足りない」から「土台を整える」へ



必要なのは人数ではなく、信頼と接続を成立させる内側の体制。

## 4.1.2 段階的指標設計

- 参画は共感から始まっていくが、継続投資には企業が社内で説明できる材料＝指標が求められる。また、地域側も合意形成に使える客観材料が必要である。参画を呼び込むためにも参画前には可能な範囲で成長性指標を示し、参画～その後の展開のためには適切な指標をともに見定め、効果と因果を見直して育てて行くことが必要。

### これまで：【双方の立場がうむズレ】



### これから：【指標で互いの因果を結ぶ】



### 【フェーズ別】指標を育てる3段階

#### Phase A | 参画検討 (入口)

客観材料で「可能性」を示す  
...地域側が参画を呼ぶ材料として提示

【基礎指標】今すぐ示せる指標  
出店数、交通量、売上など  
→企業が事業性との結びつきを示せる

#### Phase B | 参画開始 (運用)

仮説を共有し、焦点と観測点を合わせる  
...「何を変えるか」「何を見るか」合意

【発展指標】これから育てる指標  
行動変容、運用面、ウェルビーイング指標など  
→「ここを変えていく」共有仮説

#### Phase C | 展開 (振り返り・拡張判断)

実際の効果を測定、因果を分析  
...次の投資先とその根拠の明確化

データ連携・デジタル基盤・コミュニティによる実践とフィードバックが指標を育てる



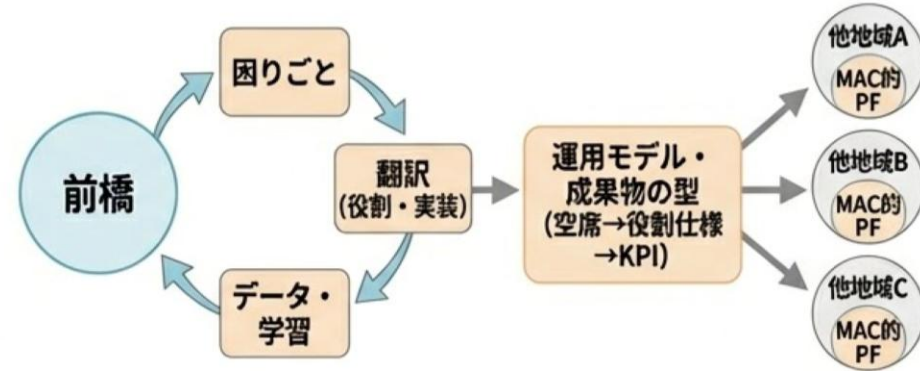
指標は双方が持つ「同じ地図」として、フェーズを経ながら育てる共同装置として機能させる必要がある。

## 5.1 今後に向けて（1年目）

- MACのロードマップとして、直近2～3年間は前橋での運用を通じてデータを蓄積し、確立したモデルの他地域展開を目指す。
- 直近1年は現実的なMAC立ち上げに向け、特定のプロジェクトに焦点を当てた運用を検討中。

### MACロードマップ：前橋で回し切り、学習し、全国に“翻訳エンジン”を増やす（2026→2028）

- 前橋で2～3年、“困りごと”を案件へ翻訳し、役割を立て、実装し、データとして残す。その循環を、まちの運用として定着させる。
- その運用モデルと成果物の型（空席→役割仕様→KPI）を移植可能な形に整え、各地にMAC的な中間支援が立ち上がる流れをつくる。



### Year1 | MACを「運用される事業」として立ち上げる（来年度の打ち手）

入口を二つに分け、企業の状態に“寄り添って”設計する



#### A：模索・視察型

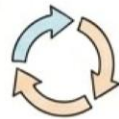
企業の状態を聞いて、模索豊富な意備を装動ととからで設計する。



#### B：実装・拡張型

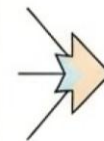
企業的な施群で実装して、倒産率と文字を参破長をお越し上げる。

回り続ける導線をつくる（毎月、自然に熱が生まれる場所）



- 前橋デザインスクールを起点に、講義+サロン/WSを重ねる
- 「接点」から始まり、「理解」を深め、「案件化」へ着地する流れを、月次で回す
- 参加企業には“次の問い”を持ち帰ってもらう（小さなSPOとしての運用）

最初の実装は“一点突破”。濃く、深く、確かに。



- 前橋国際芸術祭 × めぶくコミュニティを連動案件として動かす
- 目的は二つだけに絞る：
  - ① 空席（不足機能）を埋める
  - ② データ取得の型を確立する

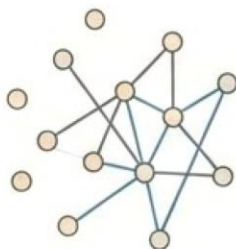
## 5.2 今後に向けて（2~3年目、その先）

- 2~3年目では対象分野・プロジェクトを拡大し、KPI確立を初めとするノウハウ蓄積を進める。
- 将来的にはMACの構造を全国に展開し、単なる複製としてではない、各地域の特性を活かした運用モデルの確立を企図。

### Year2-3 | 前橋で起きること：案件が増え、学習が溜まり、指標が育つ

#### Year2（拡張） | 点を増やすのではなく、線と網目を編む

- 都市・文化・自然を横断して案件を増やす（赤城山も射程に）
- 参画は単発の“体験”から、役割別に入れる“ポートフォリオ”へ（例：制作統括／導線編集／実装機会デザイン／データ設計など）
- 結果、街の中に「参画の入口」が増え、プロジェクト同士が滲み合い始める



#### Year3（定着） | 指標を「語るもの」から「使えるもの」へ

- 企業が腹落ちするKPI（人流・回遊／売上・取引／不動産価値／参加率等）を、現時点で提示できる形に整える
- 実装データから「何が効いたか」を学び、次の打ち手と投資判断を支える“説明可能性”を獲得する
- 成果：地域投資が“気合い”ではなく、“判断”になる。継続参画が生まれる。



前橋で起きること（要約）：プロジェクトが回りながら、街が賢くなる。前橋が、学習装置になる。

### 全国展開 | 「前橋のコピー」ではなく、各地に“翻訳エンジン”が立ち上がる

- 全国展開とは、前橋モデルの複製ではない
- 各地に「翻訳・構造化・接続」を担う中間支援（MAC的PF）が立ち上がり、地域の困りごとが案件へ変換され続ける状態をつくること
- 前橋の役割は“聖地”ではなく、参照される母艦になること（運用モデル／成果物）／学習データ／指標雛形など

